

中野拓哉作「我が献身の記 香港 1995 年」(ノンフィクション)

<前編>

智喜ナレーション わたしの名は篠田智喜。イエス・キリストの教えを伝える伝道者になるために、わたしは今、日本の神学校で学ぶため、3 年間滞在した香港を飛び立とうとしています。でも初めからこうだったわけではありません。わたしは、20 年近くも神様に背を向け、逃げ回っていたのです。

(効果音) (家庭礼拝の賛美歌)
幼いころ、近所に教会はなく、父は思うところあって牧場を経営していたため遠出はできず、我が家では元牧師であった祖父を中心とした家庭礼拝を守っていました。意味の分からない賛美歌は退屈で、中でも 5 番まで歌詞のある長い曲は嫌いでした。

祖父 天の父なる神よ。願わくは今日の一日を支え導きたまえ…。

智喜(小学生)モノあ～あ、早く終わらないかな。今日はみんなと釣りに行く約束してるのに。

祖父 さあ、智喜の番だ。祈りなさい。

智喜 あ、はい。神様…。

皆 アーメン。

祖父 なお智喜。今日の日曜日は、お前のお母さんのバプテスマ、洗礼式だ。町の教会に行くから、お前も来なさい。

智喜 (乗り気のない声で)はい。

ナレーション 中学生になっても、その教会通いは続いていました。ある時、友達の一部が洗礼を受けた時のことです。

友達A 清美ちゃん、洗礼おめでとう。

友達B ほんと、これでクリスチャンの仲間入りだね。

清美 ありがとう。智喜君、今度は君の番だよ。あとこのティーンズで残っているのは君だけなんだからね。

智喜(中学生) う、うん。

ナレーション ところが、自我の芽生えで、高校に入ると同時に両親への反発が始まり、やがて教会へも全く行かなくなりました。

母 智喜。たまには日曜日に教会に行ってみたらどうなのよ。この間手紙が来てたみたいじゃない。

智喜(高校生) (小声で)勝手に人の手紙見んじゃねえよ、全く。

母 ちょっと、人の話、聞いているの？ 今日の日曜日はどうなの？

智喜 今度もその次も部活。分かってるだろ。今は県大会前で休めないの。それにレギュラーの座が懸かってんだから。それと、今年こそは県大会突破が期待されて

て…。

母 (かぶせて)しょうがないわね。ちゃんとお祈りはしてるの？

智喜 ああ。(モノ)うっせえなあ。

ナレーション 時折、思い出したようにそそくさと祈ってみることはありましたが、それは典型的な“苦しい時の神頼み”でした。高校を出ると、無気力の当然の結果として、1年間浪人生活を送り、翌年、特に目的もなく大学に入学しました。唯一、頭にあったのは、“独り暮らしをしたい”の一念でした。

母 智喜ったら、わざわざ通えない大学を選ぶこともないのに。

智喜 だって、しょうがないじゃん。もう一つ受かった青春大学には行きたくないんだもん。後は友愛大学しか残ってないんだから。

母 青春大学だっていいじゃない。通えるんだし。

智喜 もう！ 通えないからいいんじゃないか！ あ…。

母 (ちょっと間)智喜、そうだったの。そういう理由で大学を選んだの。どうして、そんな…。

祖父 まあいいじゃないか。智喜、神様と共に歩むんだったら、神様はどんな道でも祝福してくださる。そのことを忘れずにな。

智喜 は、はい。

ナレーション そうは返事をしたものの、この時は、ただこれから始まる念願の独り暮らしに対する期待で、そんな祖父の言葉も独立のOKサインぐらいにしか思っていませんでした。こうしてわたしは、“いいかげんな大学生”になりました。父の牧場の跡を継ぐ気などさらさらなかったわたしは、大学では機械工学を専攻しました。それも、将来この分野で何かをやるうという確たる目標もないまま、大学院までずるずると7年もいることになったのです。しかし、独りになっても思っていたような自由な生活はできませんでした。わたしの身を案じた祖父の手が、この時のわたしには“魔の手”に思えたのですが、早速伸びてきました。独り暮らしを始めた数日後、近くの教会で牧師をしておられる小野寺先生が、わたしのアパートを訪ねてくださったのです。

小野寺牧師 こんにちは。篠田智喜さん。いらっしゃいますか？ 篠田さん？

智喜(大学生) あの一、どちら様ですか？

小野寺 これからお出かけでしたか？ すみません、突然お伺いいたしまして。

ナレーション 見ず知らずの人でしたが、その物腰の柔らかな雰囲気、わたしはとても引き付けられました。

小野寺 わたしは小野寺という者で、別に怪しい者ではないんですけど…といっても、あなたには怪しいですよ。

2人 (笑う)

ナレーション その屈託のない笑い声に、わたしも思わず釣られて笑い出してしまいました。

小野寺 実はですねえ、ええと、何でしたっけ。そうそう、わたし、篠田先生、あなたのおじい様の神学校の教え子なのですが、その篠田先生にですね、...あ、それ言ったら拒否されるって言われてました。すみません。今のこと、忘れてください。ああ、どうしよう。

智喜
ナレーション はあ? ... (また2人、笑い出す)
この、道化とも思える開けっ広げな小野寺先生の言動は、先生独特のものでした。祖父の差し金であることはこうしてたちどころにバレましたが、むげに断ることもできず、わたしは先生を中に招き入れました。先生は少しの時間お話をし、聖書のみ言葉を読み、お祈りをして帰っていかれました。こうしてわたしは、次の日曜日から何となく時々教会に通うようになっていったのです。何度目かの説教の時でした。

小野寺 わたしたちの中には罪があります。もうその存在に気づいておられる方も多いと思います。しかしその罪とは、多くの人考えるように doing つまり“行い”ではないんです。罪はわたしたちの“存在”つまり being なのです。そのどうしようもない罪のためにイエス・キリストが十字架に架かって死んでくださった。...

ナレーション そう語られた言葉は、わたしにある種のショックを与えました。“悪いことをしたら、神様に罰せられる。神様は何でも見ておられる。”そんな、子供のころから抱いていた「罪」や「神様」のイメージとは違っていたからです。何か特別悪いことをしなくても、自分の存在そのものが罪で、そのために、神の子が命を捨ててくださった。今思えば、これこそ福音の真髄で、神様の救いのみ手はその時、わたしの心に迫っていたのですが、この時のわたしには、神様の存在が余りに近くて、直接的にわたし自身が責められているようで、恐怖感すら覚えたのです。こうしてわたしは、神様からの内なる声に心を閉ざしてしまいました。何とかおざなりに出席していた教会も、社会に出てからは行かなくなりました。無気力でいいかげんな性格は相変わらずで、仕事にもすぐ飽きが着て、3度も職場を変えました。家のことや聖書のこと時々頭をよぎることはありましたが、その場限りのことでした。唯一のひそかな願いと言えば、「海外に行きたい」ということでした。“日本を脱出したら、何か新しい自分になれるかもしれない。”漠然とそう考えていたのです。ところが、思いもかけずそのチャンスが訪れました。3つ目の会社に転職してすぐ、香港転勤の話があったのです。わたしは、犬が飼い主の投げた骨に飛び付くように、この話にすぐに飛び付きました。

智喜(社会人) ええ! 本当ですか? わたし行きます。いいえ、ぜひ行かせてください。それで、場所はどこですか?

上司 あなたねえ、篠田君。いい年して子供のような対応するんじゃないの。まったく。そういうことはちゃんと考えてから答えを出すものです。まあいいわ。香港よ。向こうの工場と組んで技術開発に当たってほしいの。といっても勘違いしないでね。

別に左遷じゃないけど、栄転でもないんだから。ただ仕事の内容は、あなたが7年も大学にいて研究してきたことに近いんじゃないかしら。それにまだ独身だし、今いい人いないんだったら、向こうで見つけてきたらどう？

ナレーション こうして、その年の秋より香港での生活が始まりました。しかし、この香港での生活が、その後のわたしの人生を180度変えてしまうようなことになるうとは、この時はまだ知る由もありませんでした。それは、あの日本中を震かんさせた1995年の2つの事件がきっかけでした。

(音楽) (不気味な感じ)

<後編>

ナレーション 香港では、慣れない生活ながらも、「あちらでいい人を見つけたら?」と出発前に言われた上司の言葉を胸に、結婚へのそこはかたない願望を抱きながら、女性たちを見るようになりました。もう一つ、香港の街をカッコよく疾走する若者たちを見て自らも夢中になったのは、バイク、それもこの世界では最高峰のハーレー・ダビッドソンでした。すぐに数人のバイク仲間もでき、中でも、黒田ジョエルという日系2世の若者とは、大の仲良しになりました。

(効果音) (バイク音)ドルルルルル

黒田ジョエル 智喜。今度日本人教会でティーパーティーをするって言うんだけど、どうする？決まった相手もないみたいだし。

ナレーション “これも僕にとっては魔の手か”そんなことを考えつつも、出会いのない生活の数少ないチャンスを生かしたいとの思いが先に立ち、わたしはパーティーに参加することにしました。

(効果音) (会場のガヤ)

岡野真理子 今日はようこそいらっしゃいました。初めての方ですよね？お名前は何とおっしゃいますか？

ナレーション そう声をかけてきてくれたのは、岡野真理子という聡明そうな女性でした。久しぶりに聞いたきれいな日本語にすごく感動を覚えていました。

智喜 篠田、篠田智喜といます。今日は...黒田ジョエル君の誘いで...

真理子 ジョエルさんの友達ですか？じゃあもしかして、ハーレーとか乗っていらっしゃるんじゃないですか？

智喜 (照れながら)ええ、まあ...

真理子 へえー、いいですね。わたしもあのハーレーってカッコいいと思います。もし男性に生まれてたら、わたしも乗ってるでしょうね、きっと。

智喜 そうですか。何だかうれしいですね。でも、あの、女性だって乗っていいんですよ。

真理子 え？あ、そうか、そうですね。

2人 (笑う)

ナレーション 彼女と話していくうちに、実は彼女が5歳も年下であること、そしてわたしと似たような境遇でクリスチャンホームで育ったが、教会には時々行くだけであること、などが分かりました。やがて2人は、このような境遇の近さもあってか、次第に引かれ合うものを感じ、程なく結婚を意識するようになっていったのです。そして1年半後、わたしたちはめでたく結婚することができました。正直言って、まさか自分が教会で、神様と多くのクリスチャンに祝福されて結婚するとは思いませんでした。わたしはふと、“もしかしたら神様が香港に連れてきてくれて、彼女と会わせ、結婚させてくれたのでは”と思い、その時から、初めて自分の意志で教会に通うようになりました。

こうして香港に赴任して3年目、妻と2人で初めて新年を迎えた1995年1月、あの日本を震かんさせた大事件が起こりました。

真理子 ねえ、あなた。ちょっと起きて。ねえったら。日本で大変なことが...

智喜 ええ？ 真理子、どうした？

ナレーション 慌てて居間に行くと、テレビの朝一番のニュースは、阪神大震災の第1報を伝えていました。

真理子 わたしが昔住んでいた所よ。(泣きながら)ひどすぎるわ。何で、何で....

ナレーション その日、わたしたちが行っていた教会でも、緊急の祈祷会が行われ、クリスチャンであるとないとにかかわらず、多くの人たち、特に日本人たちで祈りの時が持たれました。その中で、牧師先生はこう語られました。

牧師 皆さん。まだ救われていない民が滅びに向かおうとしています。わたしたちの祖国日本が、この震災の区域に住んでいた人たちが、罪を背負ったまま死んでゆきます。心を合わせて祈りましょう。

ナレーション この言葉に、わたしはあの大学生の時の小野寺牧師の説教をはっと思い出しました。

小野寺牧師 (回想・エコー)わたしたちの中にある罪は「行い」によるものではなく、「存在」そのものが罪なのです。神様との関係が断絶している状態が、あらゆるん問題の根本原因なのです。

ナレーション わたしは、その言葉に圧倒されそうになりました。清い神様の前に、「存在」という大きな罪を背負ってうめいている自分の姿が見えたような気がしたのです。わたしは思わず声に出して祈りました。

智喜 神様。わたしはこのままでは滅ぼされてしまいます。助けてください。

ナレーション すると、まるで深い深い霧が晴れたように、突然神様の世界、信仰の世界が見えてきたのです。わたしは自分のなすべきことがはっきりと分かりました。そして驚いたことに、真理子も同様な思いを与えられました。そして翌月、わたしたちは2人そろって洗礼を受け、20年以上にわたる神様からの逃亡生活にピリオド

を打ったのでした。その日から、この阪神大震災からの復興のため、日本の救いのために、2人で祈る日々が始まりました。そして3月20日…。

智喜

ただいま。

真理子

あなた、大変。また日本で…。

ナレーション

帰宅したわたしを見るなり、真理子は手を引いてテレビのある居間に連れていきました。それはあの恐ろしい地下鉄サリン事件を伝えるニュースでした。わたしたちは思わずそこに座り込んで祈りました。

この2つの大きな事件は、関西と関東という2つの離れた場所での全く違う事件でしたが、わたしたちには「日本」という1つの国の出来事として目に映りました。海外から見ていたのでそう思えたのですが、それ以上に、何か目に見えない恐ろしい力が、愛する日本の国を打ち壊しているような気がしたのです。“この力の前に、まだ救われていない99パーセント以上の同朋が滅びに向かっている。何とかしなければ。”このような思いに駆られて、わたしたちは2人で一時帰国することを決意しました。帰国後、わたしたちはまず、あの小野寺牧師を訪ねました。

小野寺

よく来てくださいました、篠田さん。奥さんも。

真理子

初めまして。

小野寺

実はわたしは来月から、ルーマニアへ遣わされることになりました。

智喜

ルーマニア？

小野寺

もちろん、わたしにとっても、この2つの事件は大きなチャレンジでした。でも、わたしは日本でおきている今の状態を見て、反対にルーマニアに行かなければならないと強く思いました。このみことばが、その決心を与えてくれたんです。「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」(マタイ 24:14)

ナレーション

帰りの道すがら、わたしは先生の言葉を思い返していました。そしてその言葉を通して、もしかしたら神様が自分に何かを示そうとしているような気がしました。「お前はどうか」と。わたしはついに決心しました。会社を辞め、フルタイムで神様に仕えるため、日本に帰って、まず聖書に基づいた訓練を受けようと。これは妻にも大きな犠牲を強いることです。祈りつつ思い切って打ち明けたわたしに、真理子はこう言いました。

真理子

不思議ねえ。わたしも今日聖書を読んでいて、どうしても耳から離れない言葉があるの。ほら、これよ。「あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳は後ろから、「これが道だ、これに歩め」という言葉を聞く。」(イザヤ 30:21)智喜さん。神様があなたに示された道は、わたしの道。これは2人への道なのよ。

ナレーション

こうして今わたしは、日本の神学校で学ぶために、香港を飛び立とうとしています。神様が将来、殿国へ、どんな働きに遣わしてくださるか、わたしには分かり

ません。でも、こんな取るに足らない者でも、一人でも多くの人に永遠の命への道を伝えるために、神様が用いてくださるなら、喜んで従っていこうと、その日を待ち望みつつ祈っています。

神様に、妻真理子に、そしてわたしのために祈ってくださったすべての人々に感謝を込めて。香港 1995 年。

(完)